

氏名	久津見 れい
ヨミガナ	クツミ レイ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博第 17 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 11 日
学位論文題目	「言葉と音楽」という観点から見たメノッティのオペラ——《アマールと夜の訪問者》を中心に——
博士論文審査委員会	(主査) 准教授 伊達 英二 (声楽) (副査) 教授 釜洞 祐子 (声楽) (副査) 教授 武石 みどり (音楽学) (副査) 教授 藤田 茂 (音楽学) (副査) 栗山 和樹 (作曲) (国立音楽大学教授)
博士演奏等審査委員会	(主査) 准教授 伊達 英二 (声楽) (副査) 教授 釜洞 祐子 (声楽) (副査) 教授 水野 貴子 (声楽) (副査) 准教授 山洞 智 (ピアノ、ピアノ伴奏) (副査) 教授 小串 俊寿 (サクソフォーン) (副査) 教授 藤原 豊 (作曲) (副査) 教授 武石 みどり (音楽学) (副査) 末吉 利行 (声楽) (愛知県立芸術大学名誉教授、 洗足学園音楽大学講師)

審査結果の要旨

1. 博士論文審査委員会

日 時	2022年2月2日（水）14時00分～16時30分
場 所	東京音楽大学 池袋キャンパス A 地下 102
判 定	合格
審査結果の要旨	<p>結論</p> <p>3本の分析の柱を動かさず、《アマールと夜の訪問者》、また、その周辺の英語オペラを統一的に分析したことは、パイオニア的な価値をもつ行為であり、論文作成者（久津見れい）の今後の活躍に期待しつつ、合格とするのが妥当であると判断する。</p> <p>評価内容</p> <p>メノッティのオペラ《アマールと夜の訪問者》を、①拍子の変化と旋律の繰り返し、②単語のアクセントの音楽化、③フレーズの抑揚の音楽化という3つの観点から分析する意欲的なものである。</p> <p>先行研究において「アリアのようなパッセージは短くなる傾向にある」「ヒッチコック記述」など、折角、興味深い点に着眼しているのに、それに対する掘り下げた研究がなかったのが残念ではあるが、予備審査段階で不十分または説明の足りなかった部分を第4章、第5章として明確化できた点はよかった。</p> <p>また、内容が精査され、すっきりした形となり、読みやすい文章への努力がなされていた。具体的には第3章「拍子変化」と「繰り返し」の観点に対する比較考察では、譜例を用い具体的に考えが論じられていて音楽専攻論文としての特性が高くなった。第4章では棒グラフ化され、より視覚的にわかりやすくする努力がなされている。</p> <p>また分類の定義を掲載する（p.77）など読み手が理解しやすい配慮がなされている。</p> <p>《アマールと夜の訪問者》は、クリスマスの人気演目であるというだけでなく、はじめての「テレビ・オペラ」として、オペラ史の重要な作品に位置づけられ、また、「テレビ・オペラ」である以上、《アマールと夜の訪問者》は、リブレットをもたずに鑑賞されることを前提としている。それゆえ、このオペラが、いかに自然な発話に沿ったものであるかという観点は、納得のいくものであり、分析の三本柱がしっかりしたことは、とてもよかった。</p> <p>今後の課題として、メノッティ自身が台本（言葉）を作っていたことの意義をもう少し深掘りすることが今後の課題となり、またこれまでの（台本に関する）メノッティ研究とのつながりを生むことになるのではないかと。</p> <p>さらに主査としては、声楽家としての立場からこれからの研究テーマの一つを提案したい。</p> <p>メノッティ作品に於いて、英語以外の他の言語による訳詩上演の場合の発声や歌唱の問題点についての研究を期待したい（例えばビゼー作曲のカルメンのように原語の音韻を生かしたまま訳詩を制作すると、物語の内容は同じでも、全く違う歌詞をつけると物語が観客に伝わらないという例もまれに存在する）又、カルメンの場合にはいくつもの訳詩が存在し、歌手ごとに歌詞が違う、あるいは歌手</p>

	<p>が歌いやすいように作詞するといった例もあり（特にアリア）それが作曲者を冒瀆することにならないかなどの疑問点も出て来よう。</p> <p>しかし、ドニゼッティの「愛の妙薬」の中のドウルカマーラとネモリーノのデュエットに出てくる'obbligato'（オブリガート）という単語では、直訳の「ありがとう」と、日本語の「ありがとう」が偶然にも同じ意味であり「オブリガート」と「アリガトウ」の音韻も似ている事もあって、そっくりそのまま訳詩に使われていて（日生劇場版訳詩で日本オペラ界の名訳のうちの一つである。この場合、ありがとうではなく原語に倣いアリガートと歌唱する）旋律と発声を犠牲にせず、観客に伝える事に成功している。だがこんなことは非常に稀であり、訳詩を制作する場合には、大変な労力が必要になる。</p> <p>そのことも含め、これからの研究の中で、メノッティの作品群の中で研究していただき、メノッティ研究の第一人者を目指される事を、切に希望してやまない。</p>
--	---

2. 博士演奏等審査委員会

日	時	2021年6月29日（火）17時00分～18時00分
場	所	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス TCM ホール
判	定	メノッティという、一般的に余り馴染みのない作曲家の作品を研究（論文）し、声楽的にも企画としても、十分に楽しませてくれた納得のゆく演奏であり、博士号を与えるのに十分な力を発揮したと全員一致で認識した。
審査結果の要旨		<p>メノッティと、彼に関わる作曲家の声楽作品の魅力を伝えたいとの意欲が発揮された、とても聴きごたえのある楽しいプログラム構成であり、日本ではあまり知られていないジャンルに挑戦していることは、とても素晴らしいことである。また歌唱力もこの3年のうちに順調に伸びてきており、今後が期待される。一方で英語の子音の発音がやや不明瞭な事や、表現や発声がやや浅いので、もっと工夫が必要であるとの意見があった。しかしリサイタルを見て、久津見さんには発信力があり演奏にとっても感動したので、ぜひ頑張ってもらいたいとの意見が多数であった。</p> <p>またプログラムノートに関しては譜例1と2、何故出現順と逆に掲載したのか不明で全体的にプログラムノートは不親切であり、整備されているとはいえない。博士論文を執筆するほどの研究内容が投影されているとは思えなかった。馴染みのない作家の作品を鑑賞するにあたっては、道標になるようなノートを書いて欲しかった等の意見があった。</p> <p>博士課程のリサイタルとは言え、観客の全てがクラシックに精通しているわけでも、メノッティを理解しているわけでもないの、発信力を強めていくためには（企画力、プレゼンテーションの能力を向上させるための）さらなる研究と努力が必要と思われる。</p> <p>今後、声楽技術を磨き、発信力を強めてゆき、声楽家としてのメノッティ研究の第一人者となってほしい。リサイタルが終わり、あとは論文完成に全力で望めると思うので、ぜひ頑張ってください。論文の完成が今から楽しみである。</p>

以上